

あ・うん

金剛禅総本山少林寺広報誌

vol.
27

2013 弥生・卯月

道院をつくる喜び

真の修行空間に集う
頼もしい同志たち



真の修行空間に集う 頼もしい同志たち



名古屋島田道院・愛知蟹江道院では、年明け最初の修練に稽古始めを兼ねた新春法会を行っている。式の中には演武もあり、心地よい緊張感で1年が始まる。厳粛な式後には恒例のぜんざい会食があり、拳士の楽しみとなっている。



仲間にあうため休まず通う 少林寺拳法は生活の一部

なごやしまだ
名古屋島田道院
あいちかにえ
愛知蟹江道院

愛知蟹江道院は22年前、名古屋島田道院の林正義道院長が自宅兼専有道場を建てると同時に設立された。名古屋島田道院、愛知蟹江道院共にそれぞれ30人ほどの門信徒が常時在籍している。

愛知蟹江道院設立時に入門し、現在は幹部として道院に欠かせない存在になっている拳士は、「少林寺拳法は生活の一部になっています。まだまだ修行中、続けることで周りによい影響を与えられたらと思っています」と話す。片道2時間かけて通い続けている拳士は、「仕事でどんなに疲れていても、道院に来ると元気になって帰れます。自分にとっての元気の源です」と言う。

また、この地区の中学校では部活に入らなくてはならない決まりがあるが、部と道院を両立させる子が多い。ハンドボールなど運動部のキャプテンを務めながらも道院と両立させた高校生の先輩たちがおり、後輩のよきお手本となっているからだ。「少林寺拳法をやめることは考えたことがありません。道院は私にとっての『宝』です」と話してくれた。

この日のホワイトボードには、「練習は不可能を可能にする」という道院長の言葉が書かれてあった。

道院を つくる喜び

専有道場では何ら制約を受けることなく金剛禅独自の活動を展開できる。そこには単なる武道やスポーツではない、金剛禅総本山少林寺に伝承される宗門の行としての少林拳法が存在する。今号では、魅力あふれる道院長の下、すばらしい仲間とともに修行に励む名古屋島田道院・愛知蟹江道院と大阪富木道院を紹介する。

おおさかのぎ 大阪富木道院

「専有道場なのでいつでも練習できるし、教えてくれる先輩もたくさんいて楽しいです」「少林拳法を始めてから友達や学校の人に一目置いてももらえるようになりました。最初は兄について入ったのですが、だんだんと一人でできるようになって、今は下の子を教える立場になりました。責任感が強くなったのを感じます」と拳士が言う大阪富木道院は、拳士約40人のうち3分の2が一般だ。規律がとれた礼儀正しい拳士たちの姿は凛々しく頼もしい。



今井道院長がスポーツ医療に精通していることもあり、準備体操と基本修練はしっかりと時間をかけ身体を練る内容となっている。また、他武道経験者が多いのも特徴だ。



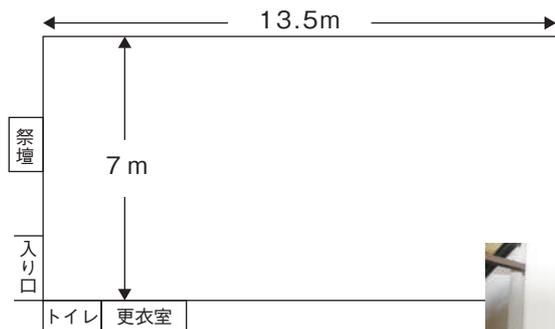
社会の指導者を目指し、 身心を錬磨する場

「道院は全てを自分たちで賄える自己完結部隊と自負しています。私自身、調理師、柔道整復師、看護師、衛生管理者、大型免許を持っており、拳士の中にも有資格者がいます。また、一般拳士は社会的実力者が多く、進路指導から就職斡旋まで行えます。自分たちのことは全て自分たちでできることを目指しています。しかし、いつも一緒でつるんでいるような気質ではないんですよ。いざというときにどっと集まってくる。武士の集まりみたいです」と今井倬夫道院長は話す。

その特徴は「私にとっての道院は心を鍛える場所です」という拳士の声にも表れている。

道院をつくる喜び

名古屋島田道院 愛知蟹江道院



1階が道場、2階が居住スペースとなっている。



はやし まさよし
林 正義道院長

1952年3月生まれ。268期生
大導師正範士七段
86年、名古屋島田道院設立
91年、愛知蟹江道院設立
愛知県教区教区長
本山考試員・本山審判員

林道院長が専有道場を意識したのは、名古屋島田道院での苦い経験からだ。道院設立から1年後、修練場所としていた文化センターの道場がマンションになるため、立ち退かなければならなくなった。次の修練場所が見つからず道院を閉める覚悟で藤田昌三熱田道院道院長へ相談に行ったところ、円通寺住職の協力を得られ天白保育園を借りることができ、存続につながった。

その苦労した経験から自宅を建て替え専有道場にしようと考えたのだ。道場建設にあたっては、反対する奥様を半年かけて説得したという。「やろうと思ったときがやれるとき」と信念を貫いた。今ではその奥様は毎年ぜんざいを作ってくれる一番の理解者である。また、道院は住宅街にあるため、ぜんざいを持って近隣のお宅への新年の挨拶は欠かさない。「元気な声が聞こえていいよ」と言ってもらえるまでになった。

「最初の10年は大変でしたが、今はとても楽しく充実しています。拳士には道院の中だけで終わるのではなく、外に活動を広げてほしいと思います。道院で学んだことを家庭や学校、社会に生かしてこそ金剛禅ですから」と林道院長は言う。

今井道院長が設計。天井の構造は高速道路の吸音構造を応用している。また、天井には登坂用ロープをつれるフックがあり、サンドバックをつるバーは1トンの重さにも耐えられるなど、こだわりが随所に見られる。



いまい ひろたか
今井 偉夫道院長

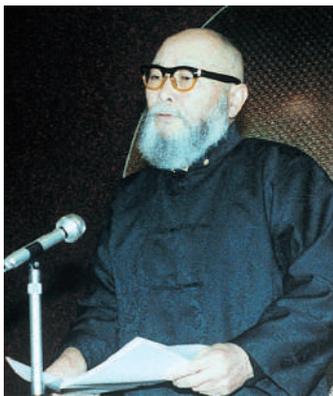
1958年6月生まれ。302期生
大導師正範士七段
92年、大阪富木道院設立
大阪府教区副教区長

「鶏口となるも牛後となるなかれ」という開祖の言葉が常に頭の中にありました。土地・家屋も登記上から個人の所有物であることにこだわりました。その方が社会的にも地域的にも信頼度が高くなり、そこで修練する拳士も正しい気位が持てると思ったからです」と今井道院長。

99年に専有道場を建設した。実際に、専有道場を持ったことで知名度が上がって興味を持ってくれる人が増えた。今井道院長は軒下にある掲示板にその時々々のひと言法話を貼り出すなどして布教に力を入れている。

「まず専有道場を設け、その伽藍堂に仏(ご本尊・法(金剛禅の教え・僧(門信徒)の三宝が備わったうえで初めて道院長としてのスタートラインに立てるのだと思っています。その上で若人に将来への夢と希望を与え、思い描き行動し続けられたいはず叶う……という方程式を伝え、人生の諸先輩方にはお世話になったご恩を態度に表し、生きる活力を与えることが道院長の役目ではないでしょうか。信条第二項の福祉に貢献するとはまさにこのことだと強く思いますし、これは医療人である現在の私のポリシーにもなっています」。

道院長の情熱こそが道を開く。



開祖語録 ダイジェスト

1979年7月8日
全国道院長支部長
講習会(2日目)で
の法話

少なくなるとも新入門生が3級になるまでは、道院長が必ず自分で教えないと私は呼びかけている。なぜかというと、少林寺拳法がいいと思つて入門した、でも助教の中途半端なやつにええかげんにこづかれ、稽古台にされて、道場へ行くことは苦しく、いじめられに行くようなもんだと。こんな助教もいるからです。

自分は少なくとも1年か2年やつてるから、多少手も粘くなつてるとし、要領も分かってきた。自分は絶対に掛からない。それで新入門生を稽古台にして、分かったか、バーンとしやくり上げて、1週間ぐらい手が痛うて動けんような稽古をする。それで、新入門生はいじめられるか

初心者は道院長が必ず教えよ

ら道場へだんだん来なくなる。この今の孤立社会に、人間関係を求めて集まつてる人もいっぱいいるわけです。そういう中で、道場は楽しい場でなければならぬ。ところが痛いとか、苦しいとか、そういう悩みの中で続けるかどうか迷つてる。その決まりは、大体最初の1、2か月の間に決まるのです。

ちよつとこれ、文章にされてるから読んでみます。まあ、いろいろ書いてあるんだが、「私が道院をやめた理由は、道院長の人格に対する不

満が最大の理由であります」と。これを書いた人は、大学を出て、社会的な地位を国家が証明している職業についてる中年の人です。

こういう人の多くは昼間は家族を養うために一生懸命働いて、余暇を楽しく生きようと道を求めて道院へ来た。それが道院長の顔色をうかがうようなことになってしまつては、嫌気がさすのは当たり前前の話です。

結局ね、先生も弟子を見てるつもりかもしれないが、弟子も先生をやつぱり見てるわけです。

清風

vol.27 宗務局長 田村 明

我々の教典は 聖句から始まる

我々の教典は聖句から始まる。これは自己確立への決心である。自身を深く掘り下げ、見つめることからしか始まらない。それは自ら信じる道への帰依を始めることの表明である。自分を知り信じる道を行く決心をすることが金剛禪の入り口であり宗門としてのあり方である。「己を寄る辺にする」とは非常に強い言葉である。自分を寄り所にするには自分そのものが身心共に健全でな

ければならない。自分を大切にすること、それが他者を大切にすることにつながる。すなわち心が健全であり身体が健康でなければならぬのである。その上で何事も他人のせいせず、自己の責任において考えることがこの教えである。

自己確立は遙かなる道であるが努力し続けることで必ず変わることができる。そして人間にはその可能性があると金剛禪では言い続けてい

る。開祖は教範の中で少林寺拳法の本質は「己を修め、己に克ち、自己を確立して、己を寄り所とするに足る人間になる、自己完成の行でなければならぬ」と説いている。

開祖の書の中に、華嚴経からの引用で「心外無法」と書いたものがある。心こそ仏性・靈性の根拠であるとの考えである。すなわち心の中にこそ「法・教え」があり自己確立の教えに結びつくのである。

金剛禪の布教

「日本に伝わった禅宗の発祥の寺は、洛陽らくようにある少林寺すうじん（嵩山すうざん少林寺）である。えっ？

少林寺が禅宗の大本山なのかと驚くだろう。そうなのである。少林寺と聞くと日本人はすぐに少林寺拳法を思いつく。この少林寺拳法が、後に台湾・沖縄経由で日本に伝わり古武道や拳法そして空手（唐手）となったのである。この事実も案外、軽視されている」。これは副島隆彦氏の著書『隠された歴史』の中の一文です。日本で少林寺といえは少林寺拳法を思いつくと言っていただけるのはありがたいいことですが、中国の少林寺の拳との混同はいただけません。

実はこの本は、ブツダの言葉こそ本当の仏教であるとして、本当のお釈迦様しやくかは「出家者（仏僧）は死に関わるな。葬式に関わるなと言ったのに、なぜ葬式仏教に成り果てたか」を、仏教に関わる隠された歴史を繕ひもときながら解説した宗教論の書なのです。

しかしながら、少林寺拳法は前述のように武道としての記述だけで、宗教団体としては触れられていません。このように、少林寺拳法は武道としては周知されているけれども、

宗門の行としてはまだまだ認知されていないという現状は認めざるをえません。

開祖は教範で「最も理性的であり、而も人間性の深さを究明して、物心両面の安らいを得られる教えは、いろいろの思想や、宗教遍歴を経てきた経験から、釈尊の正しい教えをおいて他にないと私は考えていた」として、少林寺拳法創始の翌年には「黄巾教団」という宗教団体を設立しています。釈尊の正しい教えを現代に生かし、達磨だるまの遺法である易筋行えききんぎょうを主行とする身心一如の修行を通じて自己を確立し、人間の持つ霊性を信じ、人のために役立つ生き方をしようという開祖の願いは、創始当時から一貫して変わらないのです。

また、指導者講習会でも「一応黒帯を締めようになったときには、少林寺拳法とは違うものである、どういう目的で何をやるうとしているのかと、宗教的にも思想的にも他の人と論戦をやっても言い負かされんだけのもの育てたい。身につけさせたい」と、門信徒の理論武装や質的充実を訴えておられます。ですから私たちは、外に向けては金剛禪を世間に知らせ、共に参加してもらう働き



かけをするとともに、更に重要なのは内に向けての門信徒の教化育成です。そのために小教区活動を利用して、誰もが学科の講義や法話により他人を感化する力を身につけなければなりません。

開祖は、「今回、拳法教範発行に当っては、金剛禪運動の創始者である私の宗教的信念や思想を明らかにし、その由来するところや意図する目的を明示して、この運動の協力者であり推進者である第一線の指導者諸賢の参考に供することにした。本書が各位の信念を確立し、行動に自信と誇りを持つことに役立てば幸甚である」と、1955年に教範の自序に書かれています。この言葉には、私たちに自信と誇りを持って金剛禪運動に突き進んでほしいという開祖の願いが込められています。

道

津田
武尚

日常生活での全てが修行

久米川道院 道院長 伊藤 昌昭

諺で思い切ったときに用いられるようになった「百聞石垣後飛び」、私もこの心境で思いつくままペンを走らせることをお許しください。久米川道院の伊藤昌昭です。道院開設38年目に入りました。現在、財団法人日本ボリオ研究所に勤務しております。

私は亜細亜大学少林寺拳法部に入部後、本部合宿で聞いた開祖の法話、「正直者が馬鹿を見ない世の中にしようじゃないか」との言葉が目が覚め、当たり前前のがなぜ新鮮に聞こえるのが不思議でした。開祖の魅力に取り込まれ現在に至っています。

その間、三崎敏夫先生(故人)との出会いがありました。大学卒業後、今の職場に勤務し運動不足から太ってしまったとき、胴体法を考案した後輩の伊藤昇氏から電話があったのです。「今、狭山道院で三崎先生のお手伝いなど、指導を受けているが、伊藤さんも少林寺拳法を続けてみませんか」とのお誘いでした。誘われるまま三崎先生にお会いし、「どうだ、やってみないか」とお声をかけていただきました。3年以上やっていないため体が動くかどうか心配もありましたが、三崎先生から「少林寺拳法部出身なら突き・蹴りぐら

いはできるだろうからすぐ入門せい」と、言われるままに入門しました。以来、火・木・土・日の週4回、平日は6〜9時、日曜は1〜4時まで、ハードでありましたが、がむしゃらについていきました。そして半年もたずに副道院長の任命を受けました。

その後、道院の門信徒が辞めて少なくなり、もう少し都心に近い場所を探しました。仕事上の知人である赤羽氏(故人)が東村山市で少林寺拳法の募集を近所の商店街の方に声かけしてくださったおかげで18人が集まり、場所も水・金に八坂卓球場を借りられることに決定しました。早速、三崎先生にこちらでも指導をしていただけないかと報告したところ、「お前がやればよい」と言われ、講習会を受講。あれよあれよという間に事が進み、久米川道院開設となった次第です。私が三段のときでした。

帰山で三崎先生を通して開祖にお会いしたことがあります。開祖の前では三崎先生も正座をしていたので、私も入り口で正座をした記憶があります。開祖の「頑張れよ」の声がけもあまり聞こえないほど緊張して直視できなかったことを思い出します。

現在、職場ではボリオ(急性灰白髄炎)予防のため乳幼児に対して生ワクチンを経口投与で2回接種していますが、生ワクチンで手足がマヒするボリオを発病する副作用が年間200万人に1・4人の割合で生じていると厚生労働省から報告がなされています。昨今、発症の心配がない不活化ワクチンの導入を求める声が高まり、当研究所が3種混合ワクチン(ジフテリア、破傷風、百日せき)を扱っている2社と共同研究し、不活化ワクチンの製造承認に向け協力しています。ボリオを入れた4種混合ワクチンを申請し、今年の秋口には承認の見込みです。

道院長として、一人ひとりが信念に基づいて暮らせる、平和で豊かな社会実現に努力しています。これも自他共楽ですね。仕事柄乳幼児が対象なので、日常生活での一つ一つの行動、全てを自分で制御するように修行しています。「他人の幸せを考えて行動」することは、ダーマ信仰に基づいて他人の命と尊厳を大切にすると、全てが修行と心得て日々の生活を送る気持ちが大切です。今後も理想建設に向けて金剛禅の教えに基づく行動をしていきたいと思っています。

ダイジェスト



志をつなぐ

vol.12

いましろ たかひろ
今城 隆廣 122期生
大導師大範士八段

1961年8月、本山の講習会で初めて開祖のお話を聞き、のめり込みました。世の中にこんなすごい人がいたのかと。開祖のお話は何時間聞いても飽きることがありません。以来、ほぼ毎年本山に充電に帰り、持ち帰ったものを道院で法話する、ということをお繰り返してきました。私が話すことは全て開祖のまねなのです。よく開祖がおっしゃっている

開祖のまねをしてきた人生、拳士は私の宝物

た「わしのまねをせい。生かして使え」という言葉が印象に残っています。そのまま、開祖から教わったことを忠実に実行し、いい意味で自身、変わることができたと思っています。開祖のまねをしてきてすばらしい仲間ができました。

※プロフィールや開祖の思い出など、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。



▲門下生と指導者講習会にて 1965年頃



◀入門式 1975年頃

ダイジェスト



道院長 元気の素

vol.12

ながれやまぎた
流 山北道院
わたなべ あきひこ
道院長 渡部 晶彦 (41歳)

道院での指導方法の工夫を教えてください。子供、大人を問わず、失敗を恐れずよいと思うことなら行動をしてみなさいと指導しています。心配り、心配りができたうえで楽しい人生を構築してほしいと願っています。何かを達成したときに、「あの苦労があったから」あのつらい体験があったから」と言える、強い心を持つて

人生に役立つ少林寺拳法 厳しさと楽しさは表裏一体

ほしいのです。つらい時期を越えてそう思えるようになったころには、人として成長しているはず。人間関係の大切さを最重要として指導に当たっています。護身になり、健康になり、人生にも役立つ少林寺拳法。厳しさと楽しさは表裏一体です。

※プロフィールなど、金剛禅オフィシャルサイトの全文もぜひご覧ください。

▼毎年年末は、道院大納会を開催しています。そこでは演武発表、法話、懇親、イベントを行います。



群馬県教区

本山公認講習会実施

10月20日、渋川市武道館にて講師に田村明宗務局長をお招きし、金剛禅総本山少林寺公認群馬県教区講習会を開催しました。全国に先駆けた本山公認講習会であり、本山講習会受講と同等に扱われるものです。県内から、21道院・一般財団支部、92人の参加者がありました。

鎮魂行に先立ち、田村宗務局長から、「自分に対しての誓いを立てることの意味」についての解説がありました。講義1では、「拳禪一如、力愛不二」をテーマに、金剛禅修行者のあり方についての説明がありました。また、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」の言葉を用



い、言葉を追いかけるのではなく、物事の本質を捉えることの大切さについても触れられました。講義2では、「少林寺拳法指導にあたっての心構え」をテーマに、金剛禅と少林寺拳法の指導者としての自覚と心構えについて、また開祖がなぜ少林寺拳法を創られたのかについて、説明がありました。田村宗務局長が市役所勤務を続けながら道院長として感じられたことを踏まえ、自分の夢にも「自己確立」だけでなく、「自他共榮に基づく理想境の建設」を含めることを忘れてはならない、と強く語られました。

易筋行では、三段以下と四段以上の二つのグループに分かれ、基本法形演練を行いました。田村宗務局長により、グループ相互の技を一つ一つ丁寧に指導していただき、活発な質問にも明確に回答を頂きました。爽やかな秋空の下、熱気溢れた講習会となりました。

少年部指導講習会 (佐藤靖宜)

新たな発見、そして共に創る喜び

11月17・18日の2日間、本山に少年部指導講習会が行われ、

63人が受講した。

今回のテーマは「新たな発見、そして共に創る喜び」。全体を四部で構成し、それぞれに「基調となる講義」、「討議・実習」、「振り返り」を行った。

また、本講習会では、6人1組でグループを構成し、グループごとに選出されたリーダー・サブリーダーを中心に各実習が進められた。

指導実習では、技術指導と法話・学科の指導が行われ、分かりやすく楽しく指導するため、各グループで十分に研究をして実習に臨んだ。

また、指導技術共有化レポートを各グループで作成する実習も行われ、頭を悩ませながらも、さまざまに工夫を凝らしたアイデアが出た。

講師が持つ指導技術やノウハウに加え、受講者同士、互いに刺激を与え合っており、今後の励みとなるのが本講習会の特徴である。少ない人数での講習会となったが、受講後のアンケートでは、「充実した講習会であった」との感想が多く寄せられた。

未来を担う子供たちの育成のために、この講習で得たことをぜひ、各道院での指導に生かしていただきたい。(富田雅志)

広島県教区

実習で「新春法会」「開祖忌法要」を学ぶ

12月16日、第6回広島県教区研修会が行われ、22道院・一般財団7支部、78人が集まりました。

初めに県教区役員の紹介、小教区活動の報告を行い、その後、儀式実習を行いました。前回は「入門式」と「達磨祭」でしたが、今回は「新春法会」と「開祖忌法要」です。

「儀式要領」に則って進行し、開祖忌法要実習では表白文を全文奉読し、本番さながらの実習となりました。

また、法具の説明では、所要時間によつては長い口ソクを用意する必要があるなどの具体的な説明があり、実務に役立つ解説もありました。

研修会後に意見を聞くと、「早速、年明けの新春法会で今回の実習を生かしたい」「県教区の年間行事に合同新春法会を開催するようにしてどうか」との声があり、研修会を実施した成果が表れるものと確信しています。今回も厳正な実習の中にも心が和む研修会となりました。(藤岡操)

INFORMATION

2013年勤続表彰

(順不同)

- 50年
高橋 法昇(名法道院)
久保 寛(高知中央道院)
- 45年
鈴木 秀孝(板橋菩提樹道院)
小菅 秀男(藤沢道院)

- 横山 司(名和道院)
徳嶋 繁(豊橋道院)
中山 満洲雄(須磨道院)
今城 隆廣(奈良中央道院)
池田 繁勝(防府東道院)
藤田 晋治(福岡正法道院)

- 40年
佐藤 孝利(札幌手稲道院)
坂井 紀夫(高崎道院)
吉野 忠行(埼玉深谷道院)
年綱 俊之(市原道院)
小野寺 米蔵(勝田台道院)

- 田口 典志(八千代道院)
佐名木 修(高津道院)
日當 喜澄(厚木道院)
日野原 雄次(相模原道院)
瀧口 總光(御殿場道院)
大橋 昭吾(藤枝道院)

※次ページへ続く

永田 昌範(大阪千里道院)
川口 宗勇(奈良信貴道院)
河原 弘(王寺道院)
信岡 忠士(備後新市道院)
神野 敬久(萩道院)
加藤 義秋(綾南道院)
濱田 宏行(宇和島道院)
渡部 頼忠(松山東道院)
吉田 秀樹(唐津道院)
●35年
前田 勝夫(北広島道院)
伊藤 昇市(岩手東山道院)
砂賀 晃(館林南道院)
斎藤 洋(千葉東金道院)
村田 小代子(千葉大綱道院)
菅野 明洋(東京成瀬道院)
河西 豊(三鷹中央道院)
竹内 一夫(荒川道院)
田川 光明(厚木北相道院)
夏川 勉(新潟不二道院)
草野 保廣(富山港道院)
安田 嘉昌(加賀梯道院)
市原 昇(岐阜中央道院)
杉江 祐二(岐阜南道院)
古川 利雄(美濃関道院)
清水 久一(東海荒尾道院)
足達 靖彦(宇治西道院)
中野 進(堺新家道院)
山内 謙三(大阪美原道院)
安藤 清一(東大阪若江道院)
加藤 忠(西宮樋ノ口道院)
福庭 壽(鳴尾道院)
土井 英夫(中播磨美道院)
高松 正純(三木道院)
北田 政和(播州志方道院)
川嶋 保男(加西道院)
森本 和泰(飛鳥道院)
稲尾 正巳(作東道院)
白石 光晶(岡山山陽道院)
赤木 宣雄(岡山吉備道院)
小尻 博行(音戸道院)
岡田 光明(広島五日市道院)
香川 親仁(丸亀京極道院)
坪内 道隆(別子道院)
岡田 仁利(大洲道院)
渡邊 史生(鬼北道院)
門屋 緑(高知介良道院)
渡辺 勲(高知本山道院)
梅野 清嗣(博多道院)

松尾 隆寛(福岡二丈道院)
●30年
笹谷 美津雄(帯広中部道院)
中村 信夫(北海道余市道院)
土佐 久(仙台南道院)
雨澤 芳利(いわき南道院)
菊池 孝行(福島浅川道院)
薮 孝志(白河道院)
小松崎 忠雄(茨城出島道院)
森 久雄(千葉野田道院)
本郷 昭(鳩ヶ谷道院)
林 元(埼玉鴻巣道院)
進藤 満尾(新座金剛道院)
志村 一男(千葉朝日ヶ丘道院)
浅野 幸男(成田国際空港道院)
関谷 雅敏(小櫃道院)
藤城 孝孟(浦安道院)
沖山 聖徳(東京大崎道院)
今津 好夫(横浜戸塚道院)
菅井 隆志(新潟亀田道院)
高田 晃(新潟村上道院)
勇伊 泰治(越中中川原道院)
前野 美則(高岡南道院)
宮幡 義友(山梨郡内道院)
佐藤 岩男(甲州大月道院)
佐々木 潔(石ヶ瀬道院)
宮本 典生(衣丘道院)
吉岡 修(愛知幸田道院)
橋本 春男(愛知けやき道院)
佐竹 令子(小坂井道院)
富澤 伸二(山城田辺道院)
山本 厚二(宝塚糸布道院)
田中 一成(香寺道院)
要木 博和(岡山竜之口道院)
松田 亮一(岩国東道院)
古賀 壽(柳川道院)
前畑 健治(福岡行橋道院)
有村 利雄(水俣中部道院)
●25年
佐々木和隆(京都向日町道院)
●20年
志子田 文一(千歳東道院)
笹嶋 美一(小樽道院)
星野 敏治(埼玉越谷道院)
森 勇二(君津小糸道院)
坂倉 誠一郎(千葉南道院)
平山 一雄(東京浮間道院)
高井 勉(東京五日市道院)
白濱 雅弘(町田南道院)

富山 佳則(東京神明道院)
根岸 雄次(横浜杉田道院)
山本 仁(白山あさひ道院)
水野 雅夫(羽島北道院)
石川 雅洋(富士宮北道院)
平井 富士雄(清水袖師道院)
野末 哲久(浜松篠原道院)
山本 達夫(愛知渥美道院)
落合 尚吾(三重志摩道院)
浅野 隆幸(大阪河南道院)
藤本 光理(東大阪御厨道院)
松田 省吾(豊岡道院)
市川 芳昭(伊丹北道院)
松本 好史(加古川氷丘道院)
河原 章二(大和郡山南道院)
大森 彰(岡山西大寺道院)
前野 英夫(徳島大津道院)
森山 一弘(小倉中部道院)
楠 和明(大牟田西道院)
野田 守(大牟田南道院)
上野 泉(津久見南道院)
田中 輝義(鹿児島川辺道院)
●10年
李 勇光(七飯中部道院)
神山 弘(埼玉中部道院)
金井 昌幸(埼玉新所沢道院)
森田 東吾(青梅永山道院)
丹木 康太(八王子北道院)
岡部 進(奥多摩水川道院)
田村 徹(新潟江南道院)
鈴木 之雄(石川河北道院)
辰巳 隆男(白山美川道院)
澤田 健司(信州中川道院)
堀内 誠(塩尻桔梗道院)
山内 治(浜名道院)
浅井 昌典(浜松渡瀬道院)

杉山 英利(富士南道院)
丹羽 文秀(名古屋広路道院)
日比野 信和(愛知七宝道院)
山口 潤(愛知大府道院)
青木 雅功(名古屋宝南道院)
服部 栄一(愛知豊山道院)
寺本 達也(三重海山道院)
佐脇 幸良(三重津城北道院)
青山 誠(伏見道院)
吉田 楽道(宇治道院)
平田 寛明(若狹舞鶴道院)
神谷 恵子(大阪新森道院)
森迫 剛(茨木東奈良道院)
美田 暢紀(大阪阿倍野道院)
荒川 宏史(神戸緑台道院)
高田 和典(海南黒江道院)
酒村 幸男(泉川道院)
安田 誠次郎(伊予港南道院)
木戸 英利(松山味生道院)
竹熊 浩一郎(八幡永犬丸道院)
末永 浩二(豊前中部道院)
原口 秀明(太宰府青山道院)
岩本 浩治(飯塚中部道院)
立石 靖治(大村三城道院)
立山 慎(きりしま高崎道院)

少林寺拳法グループ表彰

佐竹 令子(小坂井道院)
岡田 義夫(西尾東道院)
米田 正寛(刈谷南道院)
岐阜県少林寺拳法連盟
愛知県少林寺拳法連盟
三重県少林寺拳法連盟
東海実業団少林寺拳法連盟
東海学生少林寺拳法連盟
愛知県高等学校少林寺拳法連盟
沖縄県少林寺拳法連盟

九段特別昇格者

2013年1月13日付

大屋 昭夫(世田谷道院)

鈴木 義孝(金剛禅総本山少林寺)



法階昇格者

准範士 ■ 2012年12月16日付 山口 淳一(板橋弥生道院)

訃報

佐藤 一成 佐織道院道院長、303期生、大導師正範士七段
2012年12月20日逝去、満56歳

板津 太 鶴沼南道院道院長、362期生、大導師正拳士五段
2013年1月8日逝去、満46歳

3月の本山行事 17日(日) 帰山

4月の本山行事 13日(土) 都道府県教区長研修会・会議
14日(日) 帰山

※誌面の都合により、僧階昇任者、お布施は次号に掲載いたします。

編集後記▶春の訪れを空や風や植物で感じるようになりました。季節の移り変わりは一瞬一瞬の小計によって万人が感じることが出来ます。人生の善しあしや、移り変わりは「今ここ」を一所懸命に生きるかどうか、そしてその合計をよき人生であったと思えるかによって幸福感に差が出ます。道院での「行」も懸命に一瞬一瞬を積み重ねることで、ダーマの分霊として両親から頂いた命を生かせるのです。是非、その力を奉仕活動、復興支援に生かしましょう。(お)

表紙▶河合修 愛知県出身。日本を代表する写真家・藤井秀樹氏のアシスタントを経て独立。2009年5月より「ダーマ」をテーマに、『あ・うん』の表紙撮影に取り組む。中拳士三段。

金剛禅総本山少林寺公式サイト▶

<http://www.shorinjikempo.or.jp/religious/index.html>
2週ごとに更新される代表メッセージをはじめ、「宗門の行としての少林寺拳法」を動画でご覧いただけるほか、誌面に掲載しきれなかった記事・写真も掲載されています。

金剛禅総本山少林寺 検索

あ・うん | vol. 27
金剛禅総本山少林寺広報誌 2013 弥生・卯月

2013年3月1日発行(奇数月1日発行)

発行人：浦田武尚

発行所：金剛禅総本山少林寺

〒764-8511

香川県仲多度郡多度津町本通3-1-48

☎0877-33-1010

<http://www.shorinjikempo.or.jp>

編集人：大澤隆

企画・編集：金剛禅総本山少林寺東京別院

〒170-0004

東京都豊島区北大塚2-17-5

☎03-5961-1400

e-mail aun@shorinjikempo.or.jp

印刷・製本：(株)ブル・ドック

※本誌の発行に掛かる費用には、SHORINJI KEMPO UNITY によるライセンス事業の収益金が活用されています。

広報誌『あ・うん』追加発送について ◆◆◆◆◆

現在、広報誌『あ・うん』を1道院につき10部ずつ(一般財団支部は1部ずつ)、毎号ご提供させていただきます。更に追加をご希望の方は本山宗務部にお申し出ください。(追加1部につき50円・送料別途要)

TEL.0877-33-1010

e-mail : fukyoka@shorinjikempo.or.jp

いち ご いち え
一期一笑



イラスト/大原由軌子

三重一志道院 宮下 正徳

開祖宗道臣のふるさと

2012年9月1〜2日、岡山県美作市の少林寺拳法記念館前広場周辺の草刈り清掃に参加しました。

草刈り機の音が鳴り響く中の作業は、皆で動くところなにより早く終わらせるのだからと実感しました。5歳から81歳まで総勢43人の参加でした。2時間程度の作業終了後は鈴木義孝 SHORINJI KEMPO UNITY 顧問のお話がありました。記念碑の説明と宗道臣の正義感を育んだ大内谷での4年間のお話でした。大内谷が少年時代の重要な性格形成の場所であったことなどを分かりやすくお話くださり、皆さん熱心に聞き入っていました。その後のバーベキューでの懇親会は、楽しく和気あいあいと夜遅くまで語り合いました。

草刈り奉仕団の活動は今回4年目になるのですが、私はこれが初めての参加です。開祖のふるさとを稲尾正巳作東道院道院長のご案内で一緒に見て回り、夢を抱きました。

それはもつと家族で訪れたくなる環境づくりをしたいということだと思います。大内谷に開祖のふるさとを訪ねてのスタンプラリー大会、宗道臣が峠を越えて歩いたところをウォークラリーしながらのハイキングコースなど、家族で訪れて楽しめる場をつくりたい。3〜5年先、是非実現したいです。

奉仕活動に参加し、自分も美作の方々のお役に立ちたいと夢を持って家に帰ってきました。お世話になった皆様ありがとうございました。

投稿大募集 道場や拳士のちょっとした話を募集しています。※ペンネーム可ですが、必ず、名前、所属、連絡先もご記入ください。なお、原稿内容の整理・編集をさせていただきます場合があります。原稿の選択はご一任ください。〒170-0004 東京都豊島区北大塚2-17-5 東京別院 広報誌担当宛
TEL.03-5961-1400 FAX.03-5961-1401 e-mail : aun@shorinjikempo.or.jp

Ryuka Ken, gyaku gote



宗門の行としての少林寺拳法

りゅう かけん ぎやく ごて 龍華拳 逆小手

かぎてしゅほう
鉤手守法の後、当身から素早く相手の**ぼしきゅう** 拇指丘に**かけて** 掛手をする。続けて**こてぬき** 小手拔を行い、相手の手首を内側に巻き込みながら、**だいけんとう** 大拳頭付近に我の手首を転がすように乗せ、掛手と併せて相手の手首を極める。この一連の流れに**にそくてんい** 二足転位の運歩を行うことで円滑に転倒させることができる。

撮影／近森千展 文／永安正樹 演武者／守者：永安正樹 准範士六段 攻者：富田雅志 大拳士五段